



はじめに

当院小児科は、一般小児、小児循環器科そして新生児科との合同チームです。循環器グループが得意とする心臓カテーテル治療の発展型ともいえる心房中隔欠損症に対する経カテーテル閉鎖術（ASO）については、広く知られるようになってきました。また新生児科は地域の産婦人科クリニックと密な関係のもと、新生児寮全般への積極果敢な取り組みを続けています。

さて今回は一般小児科について述べます。一般小児科は乳児健診やcommon disease の診療、救急医療はもちろんこと、総合病院であるメリットを生かした各種の診療に取り組んでいます。

1. 血漿交換療法

血漿交換は、他に有効な治療法のない重篤な疾患の際に、患児の血液を太い静脈ルートから持続的に採取し、血漿分離器を通し血球成分と血漿成分に分離した後に、その病態を引きこした原因物質を含む血漿をすべて廃棄して、それと同量のアルブミン製剤などで置き換える治療法です。

もちろん成人領域ではかなり一般的に行われているのですが、体格の小さな幼小児では、手技的なハードルがありました。

幸いに当院では小児循環器科が新生時期からのカテーテル治療検査に長けていること、さらには臨床工学士の方々が新生児乳児の心臓手術で体外循環装置に日頃から慣れていることから、手技的なハードルは低く必要時には即座に実施できています。

この半年間では、ギランバレー症候群に伴う呼吸筋麻痺、ガンマグロブリン不応性の重症川崎病、病原性大腸菌による溶血性尿毒症候群、辺縁系脳炎による意識障害のこどもたちに実施し、幸に数日間で回復に至ることができました。

血漿交換は種々の炎症性サイトカインや各種の自己抗体を効率よく除去することができ、かつ治療適応の制限が極めて少なく、様々な難治性病態に幅広く適用することができます。

血漿交換療法を円滑に行うためには、ブラッドアクセスの確実な確保とともに、血液ポンプや交換膜など、小児版体外血液回路の取り扱いに日頃から慣れた臨床工学士や看護師の存在などチームスタッフ全員の力量が必要です。

今後さらに研鑽を積み重ねていきたいと思っています。



写真1 <川崎病に対する 血漿交換療法を実施中>

2. 内視鏡検査

成人では気管支や消化器内視鏡検査はいずれの施設でも実施できる日常的な検査なのですが、小児ことに乳幼児になると、対象の小ささと協力が得難いことから、なかなか踏み込めなっていました。しかし気管支鏡検査や消化器内視鏡検査の必要性は確実に高まっています。

当院では数年前から、内視鏡専門スタッフの協力の下に、内視鏡検査を一步ずつ慎重に進めてきました。といっても現在でも年に50例ほどの実績ですから、成人領域の1%もないくらいです。

それでも、乳幼児期の気管支異物（主にピーナッツ）、また食道異物（主に玩具・食物残渣）の摘出は内視鏡なくしてはできない治療ですし、近隣の施設からの紹介も積極的に受け入れています。

さらには、乳幼児期の食道狭窄症の拡張療法や、乳幼児の胃食道逆流（GERD）、胃潰瘍や大腸ポリープなどの確認や治療なども行っています。内視鏡は、なにより鮮明な画像で直視下に病変の有無を確認でき、かつ処置をおこなうことのできるメリットは大きく、小児科領域でもはかりしれない応用価値があります。



写真2

<左主気管支口に陥入したピーナッツを鉗子操作で摘出>

手慣れたスタッフと十分なモニター監視下に、経静脈鎮静下に安全性に十分な配慮を行いつつ慎重に、気管支・上部下部消化管内視鏡検査を実施しています。児の負担は最小限にしつつ確実な診断と治療に結びつけたいと願っています。



写真3 <小児の胃ポリープ 内視鏡的に切除>

3. BOTOX治療

BOTOXは、ボツリヌス毒素製剤で、1980年代から本格的に医学へ応用され現在広く普及してきました。その効果は身体の一部に筋注することによって、過剰な筋収縮に伴う症状を劇的に軽減することができます。

筋肉の過緊張による異常姿勢や痙性の強い状態は著しく日常生活を損ない、本人やご家族の負担は限りなく大きいものです。こうした子ども達を数多く診させていただく中で、何とかしたいという思いの中かで、私たちは8年ほど前からこのBOTOX療法に取り組み始めました。

小児整形・リハビリ科の全面的な協力のもとに、毎週2～3名に施注し、その延べ数は500回を越え、小児へのBOTOX治療経験では国内でも最も多い施設に数えられています。

成人では神経内科をはじめとし、広く普及してきていますが現在でも重症小児へのBOTOX治療を手がけている施設は極めて限られています。



写真4 <痙性マヒ小児に対するボツリヌス毒素療法>

このためBOTOX治療のため、県内はもちろんのこと、遠く熊本・大分・山口県などから数時間かけて通って来られている方々もすくなくありません。

今回は成人領域では一般的であってもなかなか小児科領域への普及が進まない特殊な治療法について、当科の取り組みの一端をご紹介させていただきました。

小児科部長：高橋 保彦